

ネガティブな評価に対する共感表明 ー発話の連鎖を中心にー

釜田 友里江

1. はじめに

本研究は、日常会話における相手への共感の示し方を発話の連鎖の観点から分析したものである。分析の対象として、「ネガティブな評価」を行っている会話を取り上げる。

本研究では、「会話相手に、自分も相手と同じ態度であることを言葉によって伝えているもの」を共感とする。

これまで、日本語会話の研究では、共感を示している話者の発話を中心に分析の焦点が当てられてきた(田中2001)。しかし、どのように共感を示しているかを、発話の連鎖から検討している研究は少ない。本研究は、ネガティブな評価に対して、共感を示すことで、相手にどのような「行為」を働きかけているかを解明することを目的とする。

会話を分析した結果、ネガティブな評価を行っている話者は、相手の反応や発話に合わせながら、自分の考えや評価を除々に明確に表明していた。そして自分を曝け出す程度や振る舞いを言語表現の調整によって行い、自らの考えや気持ちに理解を求めていた。評価を行った話者の発話を受けて、聞いている側も、相手と同じ考えや気持ちを表明するために、言語表現を調整しながら共感を示していることが分かった。聞き手は、ネガティ

ブな要素を積極的に提示したり、同じ経験者であることを表明することで、相手を支持できることを証明していた。

これまでの研究では、共感を示している発話に重点が置かれていたが、本研究の会話データから、共感を示している前の発話が、共感の示し方や言語表現に影響を与えていることが分かった。

また、言語表現や振る舞いだけでなく、発話を行うタイミングも、互いに相手に合わせることで、評価→共感発話→具体的な評価/気持ち→共感発話の連鎖が繰り返り、なされていた。このサイクルは、相手と同じ認識であることを形成する際に、効果的に働いていた。

2. 先行研究

2.1 評価

私たちは、日常生活のあらゆる場面において評価を行っている。例えば、友人と開店したカフェに行き、店を出た後で、「雰囲気良かったね」(ポジティブな評価)、「サービスがあまり行き届いてないね」(ネガティブな評価)など、互いの評価を述べることもある。また、評価の対象が人の場合もある。主婦たちの会話で、夫が家事に協力的であると誉め(ポジティブな評価)たり、夫の愚痴(ネガティブな評価)を述べたりすることもある。このように、私たちは日々、言葉に

よって様々な評価をポジティブやネガティブの側面から行っている。

齊藤 (2006) は、日本人の自己評価について分析している。言葉で表される日本人の自己評価は高くないと述べている。特に自分のポジティブな側面については、内心の自己評価よりも低く呈示することを明らかにしている。そして、日本人は内心の自己評価よりも、より控え目で自己卑下的な自己呈示をし、良好な関係を維持しようとすることを報告している。

2.2 共感

共感に関する研究は、田中 (2001) や、大津 (2001) が親しい友人同士の雑談を対象に分析を行っている。

田中 (2001) は、会話相手の提示した話題と相手の心情に共感を示している発話に焦点を当てて検討している。田中 (2001) によると、相手の心情に共感を示す際に、「その気持ち分かる」と言ったり、相手の心情を推測して「~とか?」、「~みたいな?」などと相手の心情を代弁する発話することが指摘されている。

大津 (2001) では、会話参加者間で何らかの摩擦が起こった場合、どのようにして共感的な雰囲気を持しているかを分析している。参加者間で評価の不一致 (ある事柄についての個人的な評価の違い) や事実認識が一致しない (ある事柄についての真偽判断の違い) とき、また話し手の意図と聞き手の解釈が一致しない (話し手が発話によって伝えようとした意味を聞き手が誤解した) 場合に不一致の内容に関わらず、相手への共感を示し、共感できる部分を強調することで

不一致自体を目立たなくさせ、共感的な雰囲気を損なうのを防ごうとしていると報告している。大津 (2001) は、「例えば、相手が『会議は10日だよなあ。』と会議の予定日についての確認を表明したのに対し、『12日だよ。』と不一致を表明しながらも、『ああ、毎月10日にやってるからね。』と言い、相手がそのような認識に至った理由について共感を示す場合がある」と述べている。

2.3 研究課題

これまでの研究から見出された課題を述べ、本研究の研究課題を提示する。

田中 (2001) は、話題や心情への共感の示し方や表現の特徴を明らかにすることに留まっており、発話の連鎖には着目していない。大津 (2001) は、参加者間内容に関わらず評価が一致しない場合、不一致を和らげるための1つに共感を示す方策があることを明らかにしている。しかし、評価を行う対象が目の前にある食べ物と実際に体験しているアルバイトについてでは、評価を行う際の相手との関係や、相手はどう考えているかなど相手への配慮が異なることが考えられる。そのため、評価の対象が異なれば、共感の示し方に大きく影響してくるのではないか。

本研究では、ネガティブな評価を行っている語りに焦点を当て、分析を行う。ネガティブな評価を行っている相手に、聞き手が反応を示す場合、ポジティブな評価を行っている発話に対する反応よりも、より相手との関係を考慮に入れ、相手がどのような反応を期待しているかを察知し、慎重に言葉を選ぶことが求めら

れると考えたからである。齊藤 (2006) は、良好な関係を維持するための対人ストラテジーが評価にも表れていることを明らかにしている。

本研究では、以下の3つを分析対象とする。

- ①ネガティブな評価発話
- ②ネガティブな評価発話に対して共感を示している発話
- ③評価発話 (①) と共感発話 (②) の連鎖構造

3. データの概要

本研究では、初対面の大学生同士の会話データを分析資料とする。初対面の会話を対象にしたのは、友人や家族とは異なり、相手を知る一番初めの段階であるため、相手に関する情報がゼロの中で、情報を引き出したり、理解していく過程を捉えることができると考えたからである。調査は2010年5月から6月に行った。調査対象者は、同じ愛知県内の大学に通う学部1年生の20名を対象とした。調査対象者は、初めて顔を合わせるよう、他学部でペアを組んだ。より自然な会話が起るように、調査の内容に関しての説明は敢えて行わず、自由に15分間、会話をしてもらった。会話は全てICレコーダーで録音した。15分が経過した時点で、対象者自身にICレコーダーをとめてもらった。このうち本研究では以下の4組の会話について分析する。

- (1) 女性:Aと女性:Bによる自由会話
- (2) 男性:Cと女性:Bによる自由会話
- (3) 男性:Eと男性:Fによる自由会話
- (4) 男性:Gと男性:Hによる自由会話

4. 結果と考察

4.1 ネガティブな要素を積極的に提示

以下の事例は、Aが塾の講師のアルバイトの時給を述べる場面から開始する。前の発話で、Bは飲食店でアルバイトをしていると述べている。

(1)【アルバイトに対するネガティブな評価】

- 1 A: なんか
2 : (1.6)
3 A: う: ん時給いいかなくて
4 おも-思っ [さ: 塾に]
5 B: [うんうんうん]
6 A: したんだけど
7 →A: なんかも全然よくなくて
8 →B: ほんと [に?]
9 A: [で] まだ研修だから
10 とかいつ [てさ:]
11 B: [う: ん°]
12 A: もう4月から行ってるから
13 >結構行ってるんだけど<
14 [hh.hh]
15 B: [¥うん¥]
16 B: ¥研修 [長い?¥]
17 A: [なのになまだ]
18 研修に [なってる]
19 B: [hu hu]
20 A: でなん [かえ]
21 B: [° .hh° う] ん
22 A: 75分でひとコマなんだけどさ:
23 B: う: ん
24 →A: 75分1000円って安すぎ?
25 → : (0.2)
26 →A: ちょっとひと [いよ (0.2) ね?]
27 →B: [<安いね: >]
28 →A: 有り得んよね?
29 B: うん [うんうん]
30 A: [時給] 750円じゃ [んか?]
31 →B: [え (.) そ] れ
32 →B: 塾じゃ <ない> よ [ね?]
33 A: [うん]

まず、Aは塾のアルバイトについて、時給が良いと思って決めたが、全然良くないとネガティブに評価している (7行目)。「全然」が付加されていることから、

Aは良くないと感じる強い理由を抱えていることが予想される。この発話に対して、Bは「ほんとに？」と述べることで、全然良くないことを疑うのではなく、語りの続きを促していることが分かる(8行目)。その後、Aは4月からアルバイトを始めたが、まだ研修期間であることに關して、「結構行ってる」(13行目)の「結構」や「なのにまだ研修になってて」(17、18行目)の「まだ」の表現から、塾側が考える研修期間の長さと、自らの考えが反することを伝えている。その後、Aは具体的に「75分1000円って安すぎ？」と時給について安すぎるかどうかBに確かめている(24行目)。しかしその後、沈黙が生じ、Bの応答が不在であることが分かる(25行目)。Bからの反応が得られず、「安い」という判断から、「ひどい」と感じる、感情に訴える内容に変えて、同じ気持ちかどうか理解を得ようとしている(26行目)。また、Aは「ひど」と言った後、Bの「安い」という言葉を聞き、「ひどいよ」と自らの主張を行うかたちに「ね」を付加し、「ひどいよ(0.2)ね」と相手と感情を共有するかたちで発話を構成している。一方、Bは、Aの「ちょっとひど」を聞いた時点で、相手の気持ちを捉え、最後までAの発話を聞かずにAの発話に重なるかたちで「<安いね:>」と、相手と同様に安いと感じることに共感を示している(27行目)。Aは更に断定的に「有り得んよね？」と、26行目の「ちょっとひどいよ(0.2)ね？」の発話よりも、否定的に塾を評価しながら、相手に理解を求めている(28行目)。そして、有り得ない証拠に具体的な数字で時給を750円と提示している(30行目)。この発話に対して、Bも

「<安いね:>」(27行目)よりも、更に否定するかたちで「え(.)それ塾じゃ<ない>よね？」(31、32行目)とAの発話に合わせて、塾の時給を否定的に捉えていることを共感を通して伝えていることが観察された。

また、Aは時給に関して明確に不満のかたちで述べることで、相手に理解を求めていたことが考えられる。Aが直接、不満を述べたことで、Bは相手の感じていることや評価を正確に捉えることが可能になったと考えられる。互いに相手の反応や理解を1つ1つ確かめ、聞き手は相手に合わせるかたちで、表現の伝え方を調整しながら共感を示していることが分かった。

AとBの発話が影響を与え合いながら感情に訴えたり、否定を行う程度を強めていた。

次にみる事例2も、アルバイトの不満を語っている中でみられる共感発話である。Bは、前の発話で、飲食店でアルバイトをしていると述べている。Cは、塾の講師のアルバイトをしている。大学受験部と小・中学校の個別指導の両方を担当しているため大変であると述べる場面から開始する。

(2)【アルバイトに対するネガティブな評価】

- 1 → C: めっちゃ大変なんだって(.)
- 2 → B: あそうなん[だ:]
- 3 C: [う:ん]
- ((10行省略:個別指導が80分で1900円と言われ、Cは「やったやった」と思っで行ったが、実際は、教えた後の業務などがあることについて、語っている))
- 14 C: (.)時給はい-(.)入らないん[だって]
- 15 B: [入ってないの.]
- 16 C: 入らないんだって
- 17 B: >教える時間だけしか

18 入ってな[いんだ.<]
 19 C: [>教]える時間だけしか
 20 入ってないから結局[そのなんか<]
 21 B: [あ: :]
 22 C: あいだの10分とかも入らないし: (.)
 23 B: うんうん
 (8行省略:15分前出勤や予習時間なども時給に
 反映されないとCが語っている)
 31 C: それやったらなんか時給なん
 32 600円とか[いわ]れ-か計算したら=
 33 B: [hh hh]
 34 C: =600円だったんや[ったんて:]
 35 B: [え: :]
 36→C: まじやなんだって: (.)
 37→B: 600円はちょっときつい[ね: ?]
 38→C: [600円]
 39→ きつ [いよね.]
 40→B: [割に合わ]ないね:
 41→C: >いや割に合わない<まじほん[とに]
 42 B: [う: :]ん

1行目でCは大変に「めっちゃ」を付加し、大変さの程度を強調しながら、アルバイトをネガティブに評価している。この発話に対してBは、「あそうなんだ:」とCの発話を受け入れている(2行目)。その後、詳細にCが時給について、教える時間のみが時給に反映されることを説明している(14、16、19、20行目)。そして、時給が600円であった(34行目)、「まじやなんだって:」(36行目)と「まじ」を付加することでCは真剣に嫌な気持ちを抱いており、時給をネガティブに評価することで不満を表明していることが観察できる。「まじやだね?」や「まじ嫌だと思わない?」のようにBに理解を求めるのではなく、自らの気持ちを相手に伝えるかたちで、発話を構成していることが分かる。そして、直後にBが「600円はちょっときついね:」(37行目)と文末に「ね」を付加し、上昇イントネーション

によって共感を示している。また、「600円はちょっときついよ」、「きついわ」とBの意見を述べることもできたが、「きついね:」と相手も「きつい」と感じないかを確かめている点に注目したい。「ね」の用法には、相手のほうがより確かな知識や認識を持っていると見込まれる事柄について、話し手の認識を示す用法がある(日本語記述文法研究会 2003:258-259)。既にCが600円に対して「嫌」だと言及している。Cのほうがより体験を通して感じていると想定できるネガティブな気持ちを、敢えてここでBが「きついね:」と確かめ、相手の気持ちを理解したことを伝えている。互いの気持ちを確かめながら2人が同じ方向を目指すことは、相手を知る、理解することへと、繋がっていくと考えられる。

36行目でCは、Bから理解や反応が得られるよう、発話を構成することも可能であったが、自らの気持ちを伝えることに留まっている。相手の反応や応答によって、どれだけ自分を曝け出して良いか、又は控えめに振舞うべきかなどの判断を行っている段階であったことが考えられる。そのため、Bの発話(37行目)から理解を得られたことが分かったと、Bと重なるかたちで37行目のBの「ちょっと」を外し、「600円きついよね。」(38、39行目)と述べている。Bの発話の「きつい」を繰り返すことで、「きつい」と感じている、相手と同じ気持ちであることを伝えていることが分かる。Cは36行目で「嫌」という気持ちを表明したが、39行目では「きつい」と表現することで、実感しているニュアンスが強まり、苦しい心の状態を表していることが分かる。

事例1では、Aがネガティブな評価を主張することで、Bは共感を示していたが、事例2では、ネガティブな評価を行っているCがBの共感発話を受けて、自身に関することに、更に相手とネガティブな要素を提示し合い、共感を構築していることが観察された(38、39行目)。そして、BはCと重なるかたちで、「割に合わないね」(40行目)と述べ、「ちょっときついね:」(37行目)の発話よりも更にネガティブな要素を提示している。直後に、Cは「>いや割に合わない<」と速いスピードで述べている。サックス・シェグロフ・ジェファソン(2010)は、自分の発話を開始する際に、相手の発話と重ならないように、できるだけ速く、言いたいことを述べることを私たちは、会話の中で行っていることを挙げている。この前の発話においても、何度も重なりが生じている。そのため、Cは、発話が重ならないように、自分の気持ちを素早く表明することで、相手に理解を促したのではないか。そして、「まじほんとうに」と真剣さを、直前のBの発話(40行目)よりも、程度を強調して述べていることが分かる(41行目)。

私たちは、悩みや相談を受けて、相手の気持ちを支持するために、直接、同じ経験をしていなくても、ネガティブな理由や要素を積極的に提示することで「あなたの気持ちが分かるよ」、「あなたは正しいよ」と相手に伝えることがある。事例2も、直接、経験していないBが、Cを支持するために、様々なネガティブな要素を取り出すことで、共感できることを証明していることが観察された。このCのアルバイトに対するネガティブな評価

も、不満を述べることに繋がっている。

事例1と事例2では、評価を行っている話者が、相手の反応に合わせながら、自らの気持ちを少しずつ強めながら表明し、それに合わせて聞き手も、言語表現を調整しながら共感を示していることが観察された。

4.2 共通点提示のタイミング

事例3は、評価の対象が自己である。この前の会話で、EとFは飲食系のアルバイトに就きたいが、採用されないことを述べている。

(3)【自己に対するネガティブな評価】

- 1 E: なかなかみつかんくてさ:
- 2 F: 全然だよな.ほんとにね.
- 3 E: もうカラオケが漫喫でいいかなと
- 4 思ってたけど
- 5 F: カラオケか:
- 6 カラオケでも歌われる
- 7 らしいよなんか
- 8 E: まじで?
- 9 F: うhh
- 10→E: めっちゃ下手だよ
- 11→F: あまじで?でもいいんじゃない?
- 12 なんか[で]も
- 13 E: [° hu hu°]
- 14 F: 聞いた話によると
- 15 E: う:ん
- 16 F: なんか普通の酔った客とかが
- 17 入ってきた時におっ一曲歌って
- 18 けみたい[な]感じで歌われる
- 19 E: [ha:]
- 20 F: らしいよ
- 21 : (1.0) ((お菓子を食べている音))
- 22 E: たぶんね(.)酔った客が醒めて
- 23 帰っていく[.hh]
- 24 F: [ha ha] ha ha ha
((6行省略:EとFは客のセリフを述べている))
- 31 E: う:んカラオケね(.)嫌いだけどね:
- 32 : (0.6)
- 33 E: ↑友達と↑行くのは楽しいんだけど
- 34 F: うん
- 35→E: 歌うのは嫌い
- 36→F: 歌あ:それ分かる(.)

37→ 歌うのめっちゃ音痴だからさ[:]

38 E: [う]:ん

事例3で焦点となる発話は、Eの「めっちゃ下手だよ」(10行目)に対するFの「でもいいんじゃない?」(11行目)、35行目のEの「歌うのは嫌い」に対するFの「それ分かる(.) 歌うのめっちゃ音痴だからさ:」(36、37行目)という発話である。

カラオケのアルバイトは歌わされるらしいとFが述べると(6、7行目)、Eは驚き(8行目)、歌が下手であるとネガティブに自分を評価している(10行目)。「めっちゃ」を付加することで、「下手」であることを強調していることが分かる。次のFの発話(11行目)は、「下手」に対して「あまじで?」と歌が下手であることの意外なEの一面に驚きを示していると考えられる。しかし、すぐに「でも」と、下手であることの反対、やはり上手いことが理想であるかのように前置きをし、「いいんじゃない?」とそれでも大丈夫であることを伝えている。同時にカラオケで歌わされること(6、7行目)を撤回しようとしている。もし、6、7行目の情報がなければ、10行目の発話に対するFの反応は、異なっていた可能性が考えられる。このFの発話からも分かる通り、Fはなんとか、Eのネガティブな自己評価をポジティブな方向へ誘導しようと試みている。その後Fは、Eにとって不利な情報を詳細に述べ始めている(16、17、18行目)。しかし、Eは真剣にFの情報を捉えていないことが冗談を述べていることから観察できる(22、23行目)。また、Fも笑うことで、互いに冗談を言い合っていると認識していることが分かる(24行目)。しかし、35行目でEは、「歌うのは嫌い」と歌

が下手であることだけでなく、歌うことが嫌いであるとネガティブな評価を追加している。この発話に対して、Fは「歌あ:それ分かる」と明確なたちで、共感を示している(36行目)。そして更に、「歌うのめっちゃ音痴だからさ:」と自己の歌唱力をネガティブに評価することで、10行目のEと同じ状況・経験者であることを表明している(37行目)。10行目のEが「めっちゃ下手だよ」と述べたタイミングで、Fもこの発話を行うことができたのではないか。しかし、10行目の直後にFが音痴であることを述べると、Eのネガティブな自己評価を認めることになり、支持することができなくなる。Eと同じ態度であることを伝えたくても、11行目では相手の自己評価を認めないことを表明することが優先され、このタイミングで共通点を示すことが困難だったことが考えられる。Fが自身をネガティブに評価する発話が、37行目の位置で現れたことの理由として、35行目のEの歌うことが嫌いな気持ちが分かる、共感できる証拠として、共通点を提示できる適切なタイミングだったことが挙げられるのではない。

このように本研究のデータにおいては、同じ共通点を、様々なタイミングで相手の発話や反応と合わせながら、提示することで共感を示していることが観察された。

4.3 認識のズレを埋めるための理解提示

次に、事例4について論じる。G(農学部)とH(法学部)はこの前の会話で、それぞれ異なる基礎セミナーを履修していることを話している。その後、基礎科目

について、話す場面から開始する。会話の中で、それぞれがどのような基礎科目を履修しているかは具体的に語られていない。

(4)【基礎科目に対するネガティブな評価】

- 1 G: 物理がむずか hh hh
2 H: 基礎科目がね?
3 G: そう
4 : (1.5) ((お菓子を食べている音))
5 →H: 基礎単位が全然取り
6 → にくいよ [ね?]
7 →G: [こ]うなんかね教科書が
8 → やたらと難し↑く書いて
9 → あるんだよね
10 H: あ: :
11 : (1.8) ((お菓子を食べている音))
12 G: 話してこいと hu hu [hu]
13 H: [hu]
14 →H: なんか教科書が教科書
15 → じゃないもんね?
16 →G: そうそうそう
17 : (1.8)
18 G: ん字がちさいしさ:
19 H: う: :ん

5、6行目でHは、「基礎単位が全然取りにくいよね?」と基礎単位をネガティブに捉えていることを示し、1行目の「物理がむずか」に関連させて、Gから理解を得ようとしている。しかしGは、肯定も否定もせず、基礎科目の単位ではなく、教科書に焦点を向けて、ネガティブな評価を行っていることが分かる(7、8、9行目)。その直後に、Hは「あ: :」と述べ、Gの発話を肯定も否定もしていない(10行目)。ここで、HとGの認識のズレが生じた可能性が考えられる。Hは基礎単位に関する評価を行うことでGから理解が得られると想定したが、Gの焦点は単位ではなく教科書であったことから、互いに明確な肯定も否定も行うことができない状態となったことが考えられる。しか

し、14、15行目でHは、Gが提示した「教科書」に内容を変えて、「教科書が教科書じゃないもんね?」と、教科書として機能していないと全否定している。Gが教科書について「やたらと難し↑く書いてあるんだよね」と評価した発話よりも、更に強いかたちで教科書についてネガティブな評価を行い、相手から理解を求めている。

ここで、Hの発話の言語表現に着目したい。Hの発話の5、6行目の文末には「よね」、14、15行目では「ね」が付加されている。Hの発話は、以下のように考えられる。「よね」が付加された発話では、Gも同じ感覚であるかどうかを確かめることを行い、相手の様子や考えを探っている状態であり、「ね」が付加された発話は、H自身の実感に加えて、既にGから教科書の否定が行われていることから、理解を得ることに重点を置いて発話を構成していたのではないか。相手に合わせながら共通点を提示し、理解を得ようとする過程が発話の連鎖に表れていることが分かった。

直後の16行目では、Gは「そう」を3回繰り返し、Hの発話に共感を示し、肯定している。

事例4では、互いに基礎科目に関して、相手と同じ態度であることを証明しようとしたが、認識のズレが生じた。しかし、そのズレを受け入れ、相手に合わせるかたちで理解が得られるように、ネガティブな評価を更に強めて表明していた。また、ここでは基礎科目が、評価の対象となっているが、互いにどのような基礎科目を履修しているかに関しては具体的に述べられていない。その中で、「基礎科目」

を履修していることに、共通性を見出していることが分かった。基礎科目をネガティブに評価することで、同じ基礎科目、又は異なる基礎科目であっても、理解できる部分を提示し合い、微妙な認識の違いを埋めることを試みていることが共感発話の連鎖から、観察された。また、基礎科目の不十分な点を挙げることで、愚痴の言い合いを行っていることが観察された。

5. まとめ

これまでの事例1から事例4の観察を通して、以下のことが分かった。

①ネガティブな評価を行っている話者と聞き手は、相手の反応や発話に合わせて言語表現の調整を行いながら、意志表明を行っていた。

②発話を行うタイミングを、相手に合わせることで、評価→共感発話→具体的な評価/気持ち→共感発話のサイクルができ、相手と同じ認識を確立するために効果的に働いていた。

①について、ネガティブな評価を行っている話者は、相手の反応に合わせ、理解が得られたことを確かめながら、感情を表す形容詞を用いて、気持ちを表明したり(事例1、2、3)、強い否定を行ったり(事例4)していた。また、相手から十分な反応がみられない場合は、内容を変えて再度、理解を促したり、認識のズレが生じた場合は、ズレを埋めるために共通点を見出す工夫を行っていた。一方、聞き手は、相手と同じ経験をしていない場合でも、相手に合わせて表現を強めたり、ネガティブな要素を積極的に示したり

(事例1、2)、同じ経験者であることを表明する(事例3)ことで、相手と同じ考えや気持ちであることを共感を通して伝えていた。

ネガティブな評価を行っている話者:

聞き手の反応や発話に合わせて

徐々に意志表明

事例1: 安すぎ→ひどい

事例2: やだ→きつい

事例3: 下手→きらい

事例4: 単位が取りにくい

→教科書が教科書じゃない

聞き手:

相手の評価に合わせて言語表現の調整やネガティブな要素/共通点を提示

事例1: 安い→塾じゃない

事例2: ちょっときつい→割に合わない

事例3: でもいいんじゃない

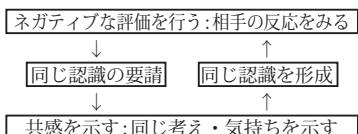
→分かる歌うのめっちゃ音痴だから

事例4: 教科書がやたらと難しく書いてある

→そうそうそう

②に関しては、言語表現や振る舞いに限らず、発話を行うタイミングも相手に合わせることで、発話の連鎖のサイクルが互いの認識が同じ方向であることを形成する際に、効果的に働いていた。

ネガティブな評価を行っている話者は、相手の反応をみながら、同じ認識であることを促していた。聞き手は、促しに応えるように共感を示すことで、相手と同じ考えや気持ちであることを伝えていた。共感発話を受けて、評価を行っている話者は、より具体的に気持ちや評価を表明し、それに合わせるかたちで聞き手が共感を示すというサイクルが観察された。



互いの認識にズレがないことを確かめながら、相手の気持ちに近づこうとする過程が、共感発話の連鎖からみられた。

7. 今後の課題

本研究では、ネガティブな評価を行っている発話に対する共感発話を分析した。今後、ポジティブな評価の中でみられる共感発話と比較することで、発話の連鎖構造の特徴をより明確にすることを目指したい。

注

会話データの文字化にあたっては、西阪 (2008) による「トランスクリプションのための記号」に従った。使用した記号の意味は以下の通りである。

[	発話の重なるの開始
]	発話の重なるの終了
:	直前の音の引き延ばしとその長さ
(())	発言の要約やその他の注記
(数字)	沈黙の長さ
(.)	0.2秒以下の短い間合い
hh	呼気音とその長さ
.hh	吸気音とその長さ
¥ ¥	発話が笑い声でなされている
↑	音調の極端な上がり
< >	発話のスピードが目立って遅い
> <	発話のスピードが目立って速い
° °	音が小さい
下線	音の強さ
?	語尾の音調が上がっている
.	語尾の音下がって区切りがついた
文字-	言葉が不完全なまま途切れている
=	2つの発話が途切れなく密着している

参考文献

大津友美 (2001) 「雑談における共感作りのためのコミュニケーション—不一致を表明する際の緩和処置について—」『言葉と文化』2 pp.211-222.

齊藤勇 (2006) 『日本人の自己呈示の社会的心理学的研究—ホンネとタテマエの実証的研究—』誠信書房.

田中妙子 (2001) 「会話における共感表明発話」『日本語と日本語教育』30 pp.51-60.

西阪仰 (2008) 「トランスクリプションのための記号」<<http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm>>(最終アクセス2013年12月10日)
日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版.

H. サックス, E.A. シェグロフ, G. ジェファソン (2010) 『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織—』西阪仰 (訳) 世界思想社 pp.7-153.

Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis* Cambridge: Cambridge University Press pp.57-101.

付記

査読者の方々からいただいたコメントに深く御礼申し上げます。

(名古屋大学大学院生)

2012年6月3日

第49回表現学会全国大会

「日本語母語話者同士の会話に現れる共感表明の機能—会話中の質問表現に焦点を当てて—」